

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成 25 年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	和歌山県	番号	5
-------	------	----	---

推進地区名	推進校名	児童生徒数
橋本市	橋本市立隅田小学校	348人

○ 調査研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 授業改善と校内研修体制の充実

ア 小学校授業改善研修の開催

平成 25 年度から 4 年間で全ての小学校教員を対象に、本県の学力の課題と授業力向上の取組について共通理解及び授業の工夫・改善を図るために、県内 8 地方で小学校授業改善研修を開催した（のべ 810 名参加）。推進地区からは、所属する小学校教員の約 3 割が出席し、研修内容を小学校国語科の授業実践に生かした。

イ リーフレット「和歌山の教育 基礎・基本」等の活用

市町村教育委員会指導事務担当者会及び市町村教育委員会訪問等において、リーフレット「和歌山の教育 基礎・基本」（平成 23 年度作成）や「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3 か条」（平成 25 年度作成）を活用した授業改善について、一層の周知を図った。

ウ 推進地区・推進校への学校訪問指導

推進地区の全小中学校（22校）を訪問し、各学校の実態に応じた学力向上を図るための指導法の工夫や、「和歌山の教育 基礎・基本」を使って、学校全体で授業改善を進めるための校内研修の在り方等について指導助言を行った。



(2) 外部人材の活用

ア 和歌山県学力向上推進検討会の設置

和歌山県学力向上推進検討会を 2 回開催し、検討員（学識経験者、学校教育関係者、社会教育関係者、PTA 関係者、教育行政関係者の 5 名）から推進校の授業実践及び補充学習の体

制等について意見を聴取し、推進校の取組の改善を図った。

イ 学習サポーターを活用した補充学習の充実

5名の学習サポーターを推進校に派遣し、放課後を活用した補充学習の充実を図った。また、学習サポーターに対するヒアリングを4回実施し、学力定着に課題を抱える児童の学習状況等を確認するとともに、補充学習の内容や実施体制等の改善を図った。

(3) 児童の学習意欲の向上と学習習慣の定着

推進校において、児童の学習意欲の向上や家庭学習の習慣化を図るために、「和歌山の教育基礎・基本」を活用し、「授業づくりの基礎・基本」「学習集団の基盤づくり」「家庭学習の充実」について、学校全体で実践する方策等の指導助言を行った。

2. 推進地区における取組

(1) 児童生徒の生活・学習意欲の向上に関わって

定例学校訪問において、1時間の授業の中に必ず協同的な学習の時間を設けるよう指導した。また、自ら課題を設定し、その解決のために主体的・意欲的に活動する児童生徒の育成を目指し、「総合的な学習の時間」に特化した学校訪問を市内全小学校（15校）中学校（7校）において実施し、探究的な学習活動の実践について指導した。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着に関わって

学習内容が十分定着していない児童生徒をつくらないために、「朝の学習時間」や「放課後の補充学習」を見直して実践するよう、校長会や職員研修等を通じて指導した。推進校に対しては、「和歌山の教育 基礎・基本」を使って1時間の授業の流れ（展開）や学習規律の確立等を確認する研修会を実施した。

(3) 教員の授業力向上に関わって

児童生徒の学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付ける授業実践を目指した研修会を実施し、招聘した講師から示範授業及び講義により指導方法や教材の扱い方等を学んだ。また、算数数学研究会と国語教育研究会を組織し、教材研究や指導案検討等の授業研究、研究授業および研究協議を行い授業力向上を図った。

6月12日（木）算数科研修（事前研修）

7月 1日（月）国語科研修（事前研修）

9月25日（水）算数科授業研修

12月4日（水）国語科授業研修

※事前研修には、招聘した講師による授業の理論及び実践についての講義を含む。

3. 推進校における取組

(1) 基礎・基本の確実な定着

ア 補充学習の実施

① 家庭学習（宿題）の支援を目的として、学力定着に課題を抱える児童を対象に、学習サ

ポーターと教員の指導による放課後学習を実施した。

○対象児童数：1～6年生の22名

○実施期間：10月～2月

○実施日：月曜日と金曜日の放課後（全27回）



② 始業前の「朝の学習」の時間に、週3回、基礎的・基本的な問題を中心とした算数復習プリント集（紀北教育支援事務所作成）に全学級で取り組んだ。

③ 学力の定着に課題を抱える児童に対して、担任が放課後の時間を利用して1週間に3回、個別指導を行った。

イ 家庭学習の充実

家庭学習に全校で取り組む雰囲気をつくるため、6月と2月に「宿題忘れゼロ作戦」（宿題実施率調査）を行い、1週間の宿題を全てできた児童への表彰を行った。

(2) 子どもに付きたい力を明確にした授業の展開

ア 授業規律の確立

① 「和歌山の教育 基礎・基本」を活用し、チャイムの合図に合わせた授業規律の確立に取り組んだ。

② 落ち着いて学習する習慣を身に付けるために、聞くことの指導に全校で取り組んだ。

イ 授業形態の工夫

6年算数において少人数指導、3年算数・5年算数・6年理科においてティーム・ティーチングによる授業を行った。また、一斉指導や、ペア・グループ学習等、学習展開に応じた学習形態を工夫し、きめ細やかな授業づくりを進めた。

ウ 思考力・判断力・表現力等の育成

外部講師等を年間5回招聘し、授業力向上等に関する研修を行った。研究授業では、橋本市国語科研究会と連携して、小学校授業改善研修（県教育委員会主催）で学んだ「単元を貫く言語活動」を取り入れた授業を実践し、その成果や課題等について協議した。

【講師を招聘した研究授業及び研究協議】

○9月18日（木）

研究授業 第5学年算数科「整数」

公約数・最大公約数を使って、課題を解決する学習活動

研究協議 グループ協議と講師による指導助言

学習意欲や考える力を高める授業展開及び教材の活用について

○12月4日（水）

研究授業 第1学年国語科「ずうっと、ずっと、大好きだよ」

登場人物のつながりに気をつけて、物語を読む学習活動

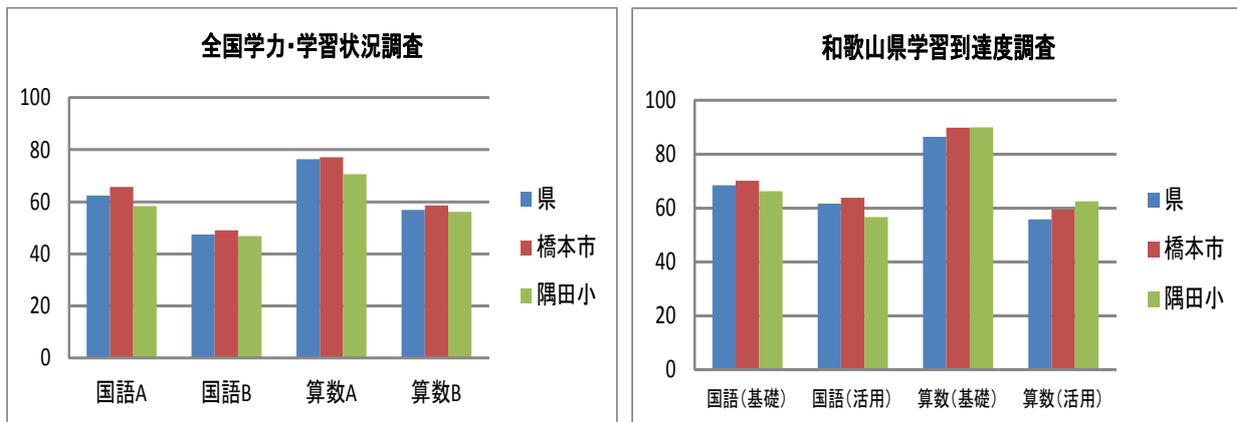
研究協議 グループ協議と講師による指導助言

単元を貫く言語活動を位置付けた国語科指導について

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

(1) 基礎基本の確実な定着



平成25年4月実施の全国学力・学習状況調査と12月実施の和歌山県学習到達度調査の結果を比較すると、国語はいずれも県平均を下回っている。算数については、全国学力・学習状況調査においてA・B問題ともに県平均を下回っていたが、和歌山県学習到達度調査においては、基礎・活用いずれも県平均を上回った。

算数科において成果が得られた要因として、次の3点が考えられる。

- ①算数の授業において少人数指導やティーム・ティーチングを取り入れるなど指導法を工夫し、わかる授業に取り組んだこと。
- ②始業前の「朝の学習」の時間に、算数復習プリント集を活用し、基礎基本の定着を図ったこと。
- ③放課後学習や担任による個別指導により、学習意欲が高まったこと。

国語科においては、十分な成果が得られなかった。主な理由として考えられることは、言語活動を充実させ児童一人一人がねらいを達成できるような授業づくりの取組が不十分であったことである。今後、国語力向上のため、読書の時間を確保するとともに児童の語彙力を高めることが必要である。また、条件や指示に従って書く力に課題があるため、「書くこと」の領域で、単元を精選し重点的な指導に取り組むことが不可欠である。

(2) 家庭学習の習慣化

6月と2月に実施した「宿題忘れゼロ作戦」の宿題実施率を比較すると、平均約3ポイント増加している。

【全校児童の宿題実施率】

	月	火	水	木	金
6 / 17 ~ 6 / 22	83%	86%	89%	89%	90%
2 / 17 ~ 2 / 21	88%	92%	92%	92%	90%

この結果から、「学校だより」「学年通信」の広報や保護者懇談会等を通じて、家庭との連携を図りながら家庭学習に取り組んだことにより、児童に「宿題は必ずするもの」という意識付けができてきたことが分かる。特に、学力定着に課題を抱える児童については、家庭の協力を得て、宿題の支援を目的とした放課後学習に取り組んだことで、家庭学習の習慣化が図られつ

つある。

【放課後学習に対する感想】

○保護者

- ・「放課後学習」に参加して個別に指導をしてもらったことで、家庭で集中して宿題ができるようになった。
- ・「放課後学習」に参加してから、家で宿題をするときも自分の力で取り組むようになった。
- ・「放課後学習」に参加してから、家で宿題に取り組む時間が早くなった。

○学習サポーター

- ・計算の手順等を自分で確認しながら自力解決したり、宿題以外のプリントにも意欲的にチャレンジしたりする姿が見られた。
- ・参加した児童が、「来て良かった。」と実感できる場となった（児童の発言より）。
- ・放課後学習がない日も、すすんで家庭学習に取り組む児童が増えた。

○教職員

- ・自力で宿題がしづらい児童にとって、家庭学習の習慣化を図る場になった。
- ・少人数指導できる体制が、家庭学習の習慣化に効果的だった。
- ・対象児童の家庭学習実施率が高まった。

2. 調査研究全体の成果

(1) 学力調査を活用した検証

【全国学力・学習状況調査】

	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B
全国平均正答率 (%)	62.7	49.4	77.2	58.4
本県平均正答率 (%)	62.4	47.5	76.4	56.9

【和歌山県学習到達度調査】

	国語（基礎）	国語（活用）	算数（基礎）	算数（活用）
4年平均正答率 (%)	70.5	53.9	73.6	62.2
5年平均正答率 (%)	54.0	47.3	70.4	38.5
6年平均正答率 (%)	68.4	61.7	86.4	55.8

全国学力・学習状況調査、和歌山県学習到達度調査の結果から、基礎的・基本的な知識や技能については概ね満足できる状況にあるが、知識や技能を活用する力には依然として課題があることが明らかになった。和歌山県学習到達度調査結果において、推進地区や推進校が県平均を上回った結果については、授業形態や発問等の工夫改善、算数復習プリント集を使った基礎・基本の徹底、放課後の補充学習による支援の成果と考える。

(2) 授業改善及び校内研修の活性化

県内全小中学校で実施している「学力向上の取組に関するアンケート」において、平成24年度と平成25年度の結果を比較すると、「授業改善」については、肯定的な回答が増加傾向に

ある。また、「校内研修の充実」については、中学校において増加傾向にある。

- 「リーフレット『和歌山の教育 基礎・基本』を活用し、教員の授業改善が進んだ。」と回答した割合

小学校：59.9% (H24) →63.5% (H25) 中学校：61.7% (H24) →66.9% (H25)

- 「研究授業等の後の研究協議会において、全教職員が主体的に参加できている。」と回答した割合

小学校：95.7% (H24) →95.2% (H25) 中学校：75.0% (H24) →77.2% (H25)

推進校では、研究授業後にK J法を用いた研究協議を実施した。回を重ねるごとに、「本時の学習課題が適切であったか」等、協議の視点を焦点化して改善策を出し合うなど活発な協議が行われ、全教職員が協議で共有した内容を授業実践に生かすようになった。市町村教育委員会訪問や学校訪問等において、リーフレット活用の普及を図った成果ととらえている。

また、11月と2月に推進校で実施した学力向上推進検討会において、評価シートを使って調査研究の検証を行った。学力向上推進検討員による評価結果は、8項目で向上が見られた。特に、教員の発問・板書、児童の学習意欲・学習規律、組織的な補充学習に関する項目については、「和歌山の教育 基礎・基本」を全教職員で共通理解して授業改善を図った結果であり、推進校の学力向上につながった。

一方、授業のめあてを具体的に示すことについては、大幅な向上は見られなかった。この項目は、本県の課題の一つであり、「和歌山の授業づくり 基礎・基本3か条」を作成し県内全校で徹底を図っているところである。推進校では、児童の学習習慣の定着に重点を置いた取組を進めることができたが、学習に対する見通しを持たせる授業づくりについては、実践に充分時間をかけることができなかつた結果と受け止めている。

	評価項目	11月	2月
1	教員は児童の学力向上を目指して、授業の工夫を行っている。	2.4	2.6
2	教員は、具体的な授業のめあて（目標）を設定している。	2.4	2.6
3	教員は、児童全員が理解できる指示や発問を行っている。	2.6	3
4	教員は、1時間の授業の流れが分かる板書を行っている。	2.4	2.8
5	児童は、学習規律を守って授業に参加できている。	2.8	3.2
6	児童は、意欲的に学習に取り組んでいる。	2.8	3.2
7	児童全員が、本時の課題を把握できている。	2.2	2.4
8	補充学習は、学校全体で組織的に取り組んでいる。	3.2	3.6
9	学習サポーターは、児童に効果的な支援を行っている。	3	3
10	補充学習に参加している児童は、意欲的に課題に取り組んでいる。	2.8	2.8

※各項目をA（よくできている）～D（できていない）で評価。表内の数値は、A～Dを4～1点として、検討員の評価結果を平均したもの。

3. 取組の成果の普及

(1) 市町村教育委員会指導事務担当者会での発表

2月に実施した第3回市町村教育委員会指導事務担当者会において、推進地区担当指導主事が、推進地区および推進校での本調査研究について発表し、県内の市町村教育委員会に対して成果の普及を図った。

(2) 県教育委員会ホームページでの情報提供

平成23年度から、学力向上に取り組む学校を「学力向上推進校」と認定し、取組の好事例を県教育委員会ホームページに公開している。平成25年度の好事例として推進校の取組をホームページに掲載し、成果の普及を図った。

(3) 推進地区等における推進校の成果の普及

平成25年度の推進地区校長会及び教頭会で、推進校の取組の成果を普及した。また、平成26年8月に推進地区で開催する教育フォーラムにおいて、推進校の実践発表を行い、取組の成果を普及する予定である。

○ 今後の課題

(1) 学力定着に効果的な教材の開発、補充学習の指導体制づくり

学力定着に課題を抱える児童生徒に対して、学力の基盤となる基礎的・基本的な知識・技能を効果的に身に付ける教材や、指導体制及び指導方法等について継続して研究する。

(2) 主体的に学ぶ力を育てる授業づくりの実践

県内全ての学校で「和歌山の教育 基礎・基本」及び「和歌山の授業づくり 基礎・基本3か条」を活用し、児童生徒の主体的に学ぶ力や活用する力を育成する授業づくりに取り組む。

(3) 検証改善サイクルの確立

平成25年度から実施した和歌山県学習到達度調査を、全国学力・学習状況調査と併せて活用し、学力向上施策を計画的に検証しながら、明らかになった課題の改善を図るシステムの確立を図る。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名	和歌山県	番号	5
-------	------	----	---

推進地区名	橋本市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

(1) 児童生徒の生活・学習意欲の向上

学力向上のためには、児童生徒のやる気・意気込みが大きな要因となるのではないかと考えた。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得の定着

「今、求められる力」である思考力・判断力・表現力等をつけるためには、まず必要なことが基礎的・基本的な知識・技能であると考えた。

(3) 教員の授業力向上

授業力改善に向けての研修会の実施により、より具体的な実践方法を繰り返し示していくことが大事であると考えた。

2. 重点課題への取組状況

(1) 児童生徒の生活・学習意欲の向上に関わって

市教育委員会では、定例的な学校訪問において、学校長から学力向上方策等の聴取・全学級公開授業・研究授業・研究協議を実施している。この訪問で、1時間の授業の中に必ず協同的な学習の時間を入れるよう指導してきた。ペア学習・グループ学習、全体学習で発表することは、他との関わりを高め、学びを広げたり深めたりできるおもしろさ・楽しさを実感できるからである。

また、本市では、自ら課題を設定し、その解決のために主体的・意欲的に活動する児童生徒の姿を求めて、全小中学校において「総合的な学習の時間」の見直しを図った。そのため、文部科学省教科調査官 田村学氏を2回招聘し研修会を実施した。また、定例の学校訪問に加えて、「総合的な学習の時間」に特化した学校訪問を市内全小学校(15校)中学校(7校)において実施し、つきたい力や探究的な学習を具現化するための活動の見直しを行った。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得の定着に関わって

1時間の授業の中で、全ての児童生徒に授業のめあてであるつけたい力をつけることはもちろんであるが、学習内容を十分理解できないまま積み残していく児童をつくらないために、できるだけ早い時期に補充を入れる必要がある。そのための時間は、「朝の学習時間」や「放課後の補充学習」ととらえ、取組について見直し実践するよう校長会や職員研修等を通じて指導した。

推進校に対しては、県教育委員会作成「和歌山の教育 基礎・基本」について、県教育委員会指導主事を招聘し、1時間の授業の流れ（展開）や学習規律の確立等について確認する研修会を実施した。

(3) 教員の授業力向上に関わって

児童生徒の学習意欲を高め、確実に基礎的・基本的な知識・技能を身に付けるような授業ができるように研修会を実施した。本年度は、筑波大学附属小学校副校長の細水保宏氏を招聘し、小・中学校の2校で示範授業を実施した。市内全小中学校教員で、69名の参加があった。

本市では、算数数学研究会と国語教育研究会を組織し、「今、求められる学力をつけるための授業改善」をテーマに研究を委託している。この研究会の活動とともに、研究校（高野口中学校・隅田小学校・紀見小学校）において教材研究や指導案検討等の授業研究、研究授業および研究協議を行い授業力向上を図った。

なお、この授業研修の事前研修として、京都市教育委員会から講師2名を招聘し、授業づくりの理論及び実践について指導を受けた。

6月12日（木）算数科研修（事前研修）

7月 1日（月）国語科研修（事前研修）

9月25日（水）算数科授業研修

12月4日（水）国語科授業研修

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 児童生徒の生活・学習意欲の向上に関わって

本市所管の小学校で4月と2月に実施した児童アンケート結果を比較した結果、肯定的な回答をした児童の割合が増加している。

質問項目	4月	2月
学校に行くのは、楽しいと思いますか。	54.3	59.7
授業の内容はよく分かりますか。	41.4	52.0

この結果から、本市における授業改善や総合的な学習の時間での取組が、一定の成果を上げていると考える。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得の定着に関わって

7月と12月の「学力向上の取組に関するアンケート」（和歌山県教育委員会）は、補充学習について次のような結果であった。

- ・市内全小中学校で補充学習を実施した。

- ・教員とボランティアが協力して補充学習を実施する学校が4校から8校に増えた。
- ・教育計画に補充学習の時間を位置づけ、継続的に曜日や時間を決めて取り組むようになった学校が7校から10校に増えた。

組織的・計画的な補充学習は、全小中学校に広がっていることがわかる。

また、平成25年度全国学力・学習状況調査結果（4月実施）と和歌山県学習到達度調査（12月実施）で和歌山県と本市を比較すると、算数科・国語科ともに県平均を上回っているが、特に算数科で伸びが見られた。各学校での取組の結果、学力の定着が図られてきていると考える。

調査科目	算数科		国語科	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
算数科	67.5	10.5	67.5	10.5
国語科	67.5	10.5	67.5	10.5

(3) 教員の授業力向上に関わって

京都市教育委員会の講師から、今求められる力をつけるための授業のあり方についての研修を受けた後、実際に授業を行うことで、授業の視点等の理解が深まった。また、県教育委員会主催の小学校授業改善研修に多くの教員が参加したことで、国語科での「単元を貫く言語活動の実践」のイメージを共有しながら、実践につなげることができた。

さらに、算数数学科及び国語科教育研究会の活動が活性化することにより協議に深まりが見られ、発問や板書、ねらいにせまるための言語活動など、教員の授業に対する意識も変容した。学習指導要領が改訂され小学校においては3年が経つが、着実に授業改善が浸透してきている。例えば、1時間の授業の中に子どもたちの思考の時間を必ず入れることや、終末にふり返りの時間を確保することなどである。

4. 今後の課題

学力向上を図る上で、教科指導を充実させることは勿論ではあるが、児童生徒の学習意欲・生活意欲を高めることも同様に大切で、その意欲を引き出す時間を「総合的な学習の時間」であると本市ではとらえ取り組んできた。少しずつではあるが、児童に活力が見い出せてきたと感じている。この具体的な成果数値については、来年度の全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙で、再度見取っていききたい。

また、活用力をつけるためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得が不可欠であり、授業の中で積み残した学習内容をできるだけ早く補っていく必要があると考える。推進校で実施したような学校全体で組織的・継続的に取り組む方法を更に探っていききたい。

授業改善については理論から実践に移す難しさを感じているが、市内の教員が大勢参加できる態勢を整えるなかで、優秀な教員を招聘し、示範授業の公開を繰り返し実施することで教員の授業力向上を目指したい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	和歌山県	番号	5
-------	------	----	---

推進校名	和歌山県橋本市立隅田小学校
------	---------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

(1) 基礎・基本の確実な定着

- ア 効果的・計画的な補充学習の充実
- ・学習サポーターを活用した放課後学習の実施
 - ・始業前のプリント学習
 - ・放課後の個別指導

イ 家庭学習の充実

- ・宿題調査を実施
- ・「家庭学習のすすめ」を全校児童に配付

(2) 子どもに付けたい力を明確にした授業の展開

ア 授業規律の確立

- ・チャイムの合図に合わせた授業規律の確立
- ・聞くことを中心とした授業の展開

イ 授業形態の工夫

- ・少人数指導、チーム・ティーチング、グループ学習、ペア学習等の実施

ウ 思考力・判断力・表現力等の育成

- ・外部講師による授業力向上の指導
- ・校内授業研究、提案発表、相互参観の実施

2. 重点課題への取組状況

(1) アに関わって

家庭学習（宿題）の支援を目的として、学力定着に課題のある児童22名を対象に学習サポーターと教員が協力しながら10月から2月までの週2回（水曜日・金曜日）、合計27回の放課後学習を実施した。



また、始業前の「朝の学習」の時間や授業の始めや終わりを使い、1週間に3回、基礎的・基本的な問題を中心とした算数復習プリント集（紀北教育支援事務所作成）に全学級で取り組んだ。

さらに、基礎的・基本的な学習内容の定着に課題のある児童に対して、担任が放課後の時間を利用して1週間に3回、個別指導を行った。

(1) イに関わって

家庭学習に全校で取り組む雰囲気をつくるため、7月と2月のそれぞれ1週間を使って宿題調査を実施し、1週間の宿題を全てできた児童を表彰した。

また、「家庭学習のすすめ」を作成して、全校児童に配付するとともに、保護者会等を通じて家庭との連携を図った。中・高学年では、「家庭学習のすすめ」に基づき自主学習へと発展させる取組を行った。

(2) アに関わって

チャイムの合図を守り授業が開始できることを目標に、児童への学習規律の意識付けを行った。また、落ち着いた雰囲気の中で学習できるよう、「聞く」ことを大切にしながら言語活動を中心とした授業を行った。

(2) イに関わって

6年算数において少人数指導、3年算数・5年算数・6年理科においてティーム・ティーチングによる授業を行った。全体学習・グループ学習・ペア学習等、学習展開に応じた学習形態を活用し、きめ細やかな授業の取組を進めた。

(2) ウに関わって

6月と9月に京都市特別訪問指導員 浅野伴子氏、7月と12月に京都市総合教育センター研修主事 中城あさ代氏、10月に紀北教育支援事務所より2名の指導主事を招聘して授業力向上及び学習規律の確立等に関する研修を行った。

また、全学年において研究授業（3年は「総合的な学習の時間」の取組の提案発表）を実施した。12月に実施した研究授業では、橋本市国語科研究会と連携し、県教育委員会主催の小学校授業改善研修で学んだ「単元を貫く言語活動の実践」を取り入れた授業を実践し、その成果や課題等について協議した。

【講師を招聘した校内研修】

○9月18日（木）

研究授業 第5学年算数科「整数」

公約数・最大公約数を使って、課題を解決する学習活動

研究協議 グループ協議と浅野伴子氏による指導助言

学習意欲や考える力を高める授業展開及び教材の活用について

○12月4日（水）

研究授業 第1学年国語科「ずうっと、ずっと、大好きだよ」

登場人物のつながりに気をつけて、物語を読む学習活動

研究協議 グループ協議と中城あさ代氏による指導助言

単元を貫く言語活動を位置付けた国語科指導について

7月と1月には、全教員による授業の相互参観を行い、教員間で児童の学習規律の確立を図

る取組や、思考力・判断力・表現力等の育成を図る効果的な手立て等を共有した。2月には、広島大学附属小学校の研究発表会に2名参加し、参考となる取組等を教職員に伝達するとともに各学級での指導に生かした。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 基礎学力・活用力についての学びの見取り

6年生	全国学力・学習状況調査		和歌山県学習到達度調査	
	本校	県	本校	県
国語A(基礎)	58.4	62.4	66.3	68.4
国語B(活用)	46.8	47.5	56.7	61.7
算数A(基礎)	70.6	76.4	90.0	86.4
算数B(活用)	56.2	56.9	62.5	55.8

平成25年4月実施の全国学力・学習状況調査と12月実施の和歌山県学習到達度調査の結果を比較すると、国語はA・B問題いずれも県平均を下回っている。算数については、全国学力・学習状況調査においてA・B問題ともに県平均を下回っていたが、和歌山県学習到達度調査においてはいずれも県平均を上回った。

算数科において成果が得られた要因として、次の4点が考えられる。

- ①算数の授業において少人数指導やティーム・ティーチングを取り入れるなど授業形態を工夫し、わかる授業に取り組んできたこと。
- ②放課後学習・「宿題忘れゼロ作戦」・「家庭学習のすすめ」の活用などにより、家庭と連携を図りながら家庭学習が習慣化する取組を進めたこと。
- ③担任による個別指導により学習意欲が高まったこと。
- ④始業前の「朝の学習」の時間に、算数復習プリント集を計画的に取り入れ、基礎基本の定着を図ったこと。

国語科においては十分な成果が得られなかった。主な理由として考えられることは、読書の時間を十分確保できなかったこと、言語活動を充実させ児童一人一人がねらいを達成できるような授業づくりの取組が不十分であったことなどである。但し、漢字の読み書きについては、ドリル学習に加え、県教育委員会「漢字の博士試験」を年間2回実施し全校で取り組んだ成果が表れている。

今後、国語力向上のため、読書の時間を確保するとともに全学年で県教育委員会作成「ことばの力向上のための参考資料集」の活用を図り、児童の語彙力を高めたい。また、「書く」領域では、条件や指示に従って「書く」力に課題があるため、単元を精選し重点的に取り組み、1時間の学習のねらいを達成するために言語活動の充実を図った授業づくりに努めたい。

(2) 「宿題忘れゼロ作戦」

(宿題忘れ調査結果)

	月	火	水	木	金
6/17～6/22	17%	14%	11%	11%	10%
2/17～2/21	12%	8%	8%	8%	10%

全校児童を対象に宿題忘れの調査を6月と2月に実施した。6月に比べ2月は宿題忘れが平均約3ポイント減少している。この結果から、児童に「宿題は必ずするもの」という意識づけができてきたことが分かる。これは、「学校だより」や「学年通信」などで宿題や家庭学習について取り上げたことで、家庭での学習に対する保護者の意識を高め協力を得ることができたことも大きな要因になっていると考えられる。

6月と2月に共通していることは、1週間を通して見ると月曜日の宿題忘れの割合がやや高いこと、特定の児童が宿題をしてこない傾向にあることである。忘れてくる主な理由は、連絡帳に宿題を書いていない、宿題を学校に忘れた、宿題プリントをなくした、持ってくるのを忘れた、中でも特に多かったのが児童が音読をしたことに対する保護者のサイン忘れである。学校では、担任が日常的に宿題忘れのチェックを行い適切な対応に努めているが、再度、宿題を忘れる児童の理由を把握し自らの取組を見直すとともに家庭と連絡を密にしながら家庭学習の徹底を図りたい。

(3) 保護者との個人懇談によるヒアリング

児童の家庭での学習状況について、個人懇談会等の機会を利用して保護者から聞き取りを行った。学力定着に課題を抱える児童の家庭では、保護者が児童に宿題をさせることに悩みを抱えていることが分かった。宿題の支援を目的とした「放課後学習」に参加した児童の保護者からは、以下のような感想が多数寄せられた。

- ・「放課後学習」に参加して個別に指導をしてもらったことで、家庭で集中して宿題ができるようになった。
- ・「放課後学習」に参加してから、家で宿題をするときも自分で考えてするようになった。
- ・「放課後学習」に参加してから、家で宿題に取りかかるのが早くなった。等

このことから、「放課後学習」に参加した児童について「宿題は必ずするもの」という意識や意欲が少しずつ高まり、家庭学習の習慣化がすすんできたことがうかがえる。

一方、補充学習の指導者からは、以下のような感想が出されている。

【学習サポーターの感想】

- ・計算の手順等を自分で確認しながら自力解決したり、宿題以外のプリントにも意欲的にチャレンジしたりする姿が見られた。
- ・参加した児童が、「来て良かった。」と実感できる場となった（児童の発言より）。
- ・放課後学習がない日も、すすんで家庭学習に取り組む児童が増えた。
- ・サポーターが多い日は、個別指導により落ち着いて学習できた。
- ・補充学習後のミーティングで指導法を確認することで、個に応じた支援を行うことができた。

【教員の感想】

- ・自力で宿題がしづらい児童にとって、家庭学習の習慣化を図る場になった。
- ・対象児童は、放課後学習に喜んで参加できた。保護者にとっても好評であった。
- ・少人数指導できる体制が、家庭学習の習慣化に効果的だった。
- ・対象児童の家庭学習実施率が高まった。

家庭学習の習慣が身に付いていないことで、学力定着に課題を抱えている児童については、

家庭訪問や懇談会をもちながら改善に努めてきたが、十分な成果は表れていない。学習基盤となる基本的な生活習慣について、関係機関と連携を図りながら取組を進め、引き続き家庭と連携しながら支援したい。

4. 今後の課題

(1) 授業力の向上

- ①つきたい力を明確にして授業にのぞみ、全ての児童が「わかる授業」に取り組む。
- ②児童が自分の思いや考えを言葉で表現する課題や機会を授業に取り入れる。

(2) 補充学習の充実

- ①学習ボランティアや教員の組織力を生かし、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための、効果的な補充学習の体制や教材について研究する。
- ②学力に課題を抱える児童についての個別カルテを作り、全教職員で課題等を共有して支援する。

(3) 生活習慣と学習習慣の定着

- ①家庭と連携しながら、宿題を必ず行い、学習用具を確実に準備することを徹底させる。
- ②授業とのつながりを考えた宿題の出し方について工夫する。
- ③「早ね・早起き・朝ごはん」を徹底する。